ISSN 2435-6018

REPORT @KCUA

Kyoto City University of Arts
Art Gallery @KCUA

2018–2019

Table of Contents
目次

展覧会 | Exhibitions
17 特別展 | Special Exhibitions
49 申請展 | KCUA Open Call Exhibitions
75 大学事業 | KCUA Exhibitions

86 イベント・その他 | Events, etc

88 印刷物 | Printed matter
91 刊行物 | Publications
94 @KCUAについて | About @KCUA
96 運営委員会 | Steering Committee

凡例
・ 肩書きは2018年度当時
・ 特に会場名の明記のないものは京都市立芸術大学ギャラリー @KCUAにて実施
・ Names are listed in Japanese alphabetical order (some exceptions may apply).
・ All exhibitions and events were held at Kyoto City University of Arts Art Gallery @KCUA unless otherwise noted.

COVER PHOTOS

明治150年・京都のキセキ・プロジェクト
京都市立芸術大学芸術資料館収蔵品活用展
田村友一郎「叫び声／ Hell Scream」

前身である京都府画学校が明治13年に創立されてから今日に至るまで、京都市立芸術大学は、日本の芸術文化のきわめて重要な世界への発信基地の一つであり続けてきました。平成30年が明治改元から満150年の節目の年に当たることを記念した「明治150年・京都のキセキ・プロジェクト」の一環として開催された本展では、土地の記憶や歴史を調査することからその場所固有のコンテクストを独自の手法で変換・接続し、映像・写真・インスタレーション・パフォーマンスなどさまざまな形態にて新たな風景を立ち上げる美術家の田村友一郎を企画協力作家に迎え、本学の前身・京都府画学校の創立者の一人であり、日本画家の田能村直入（1814–1907）の足跡を辿りながら、新たな物語を紡ぎ出すことにより本学芸術資料館収蔵品の「演出」を試みました。

（→pp. 19–28）
Photos by Yuichiro Tamura

REPORT @KCUA
2018–2019

京都市立芸術大学 Kyoto City University of Arts @KCUA

2018.4.7 Sat.–5.20 Sun.

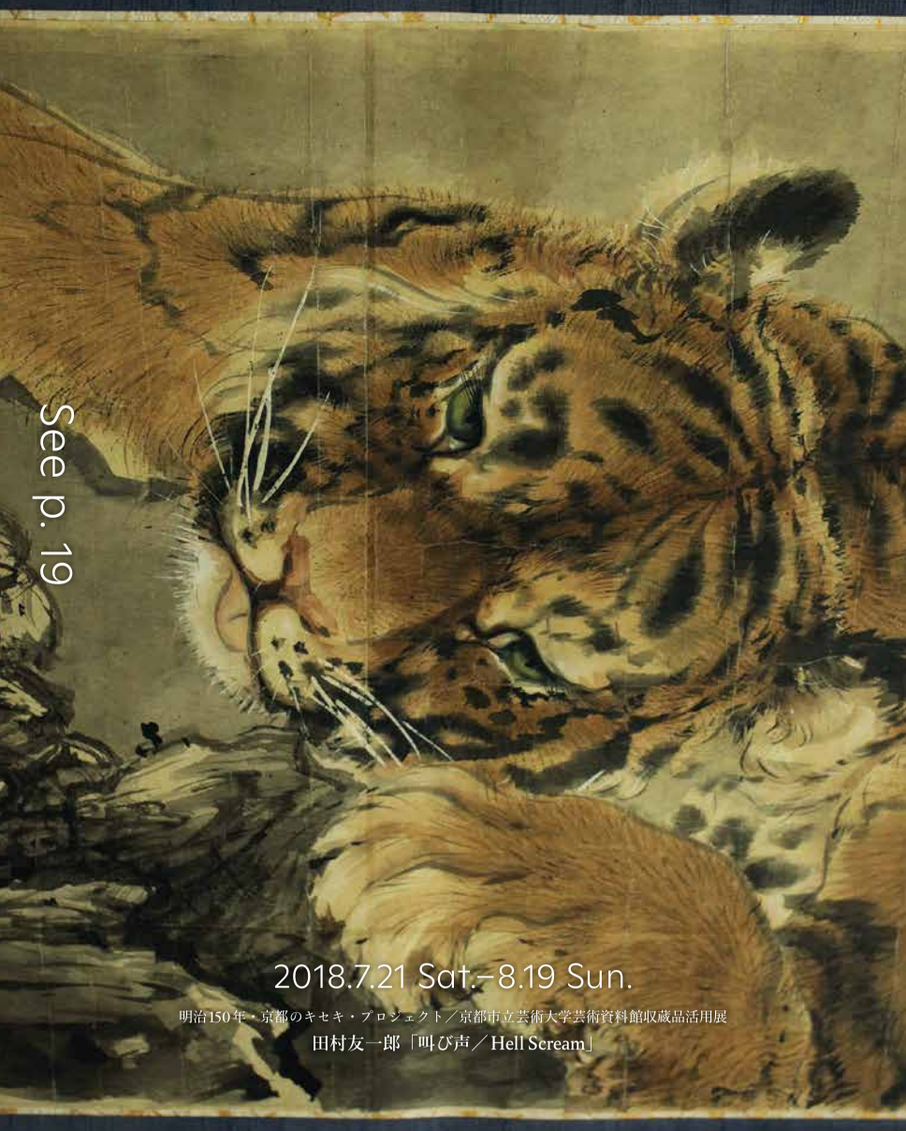
京芸 transmit program 2018

See p. 29

2018.6.2 Sat.–7.8 Sun.

im/pulse: 脈動する映像

See p. 37



2018.7.21 Sat.–8.19 Sun.

明治150年・京都のキセキ・プロジェクト／京都市立芸術大学芸術資料館収蔵品活用展

田村友一郎「叫び声／Hell Scream」

See p. 19

2018.7.21 Sat.–8.19 Sun.

明治150年・京都のキセキ・プロジェクト／京都市立芸術大学芸術資料館収蔵品活用展

田村友一郎「叫び声／Hell Scream」

See p. 51

2018.8.25 Sat.–9.2 Sun.

大谷史乃・長町那美・前田菜月「人工的品」

See p. 55

2018.9.15 Sat.–10.28 Sun.

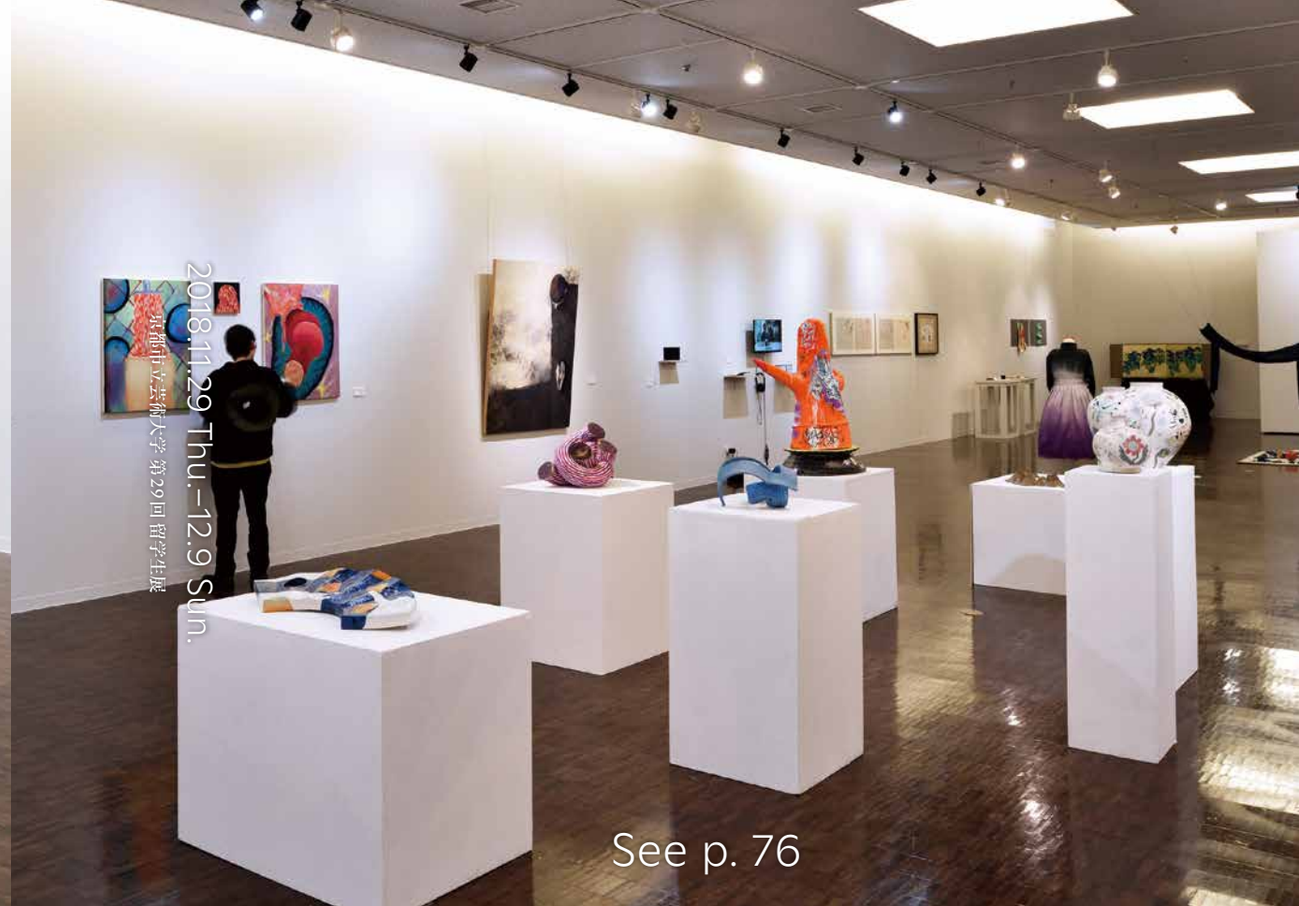
クリスチャン・ヤンコフスキー「Floating World」

See p. 43

2018.11.10 Sat.–11.25 Sun.

秋山陽 ―はじめにありき―

See p. 80



2018.11.29 Thu.–12.9 Sun.

京都市立芸術大学 第29回 留学生展

See p. 76

2018.11.29 Sat.–12.9 Sun.
いわゆるかまがさき 一時間絵ヶ崎一
See p. 59

2018.12.15 Sat.–12.24 Mon.
Partition パーティション
See p. 63

2018.12.15 Sat.–12.24 Mon.

松井沙都子「モデルハウス」

See p. 67

2019.1.12 Sat.–2.11 Mon

狭間のアーキテクチャー展

See p. 84

2019.2.16 Sat.–3.3 Sun.

2018年度 京都市立芸術大学美術学部同窓会展

See p. 78

2019.2.16 Sat.–3.3 Sun.

前田耕平「バンガシアノドン ギガス」

See p. 71

See p. 82

SPECIAL EXHIBITIONS

Curated by
Kyoto City University of Arts
Art Gallery @KCUA

特別展

「特別展」とは、@KCUA学芸スタッフの企画による展覧会です。芸術を育む場所である芸術大学のサテライト施設＝発信拠点である@KCUAでは、作品について「考える」「作る」プロセスを公開する場として、また大学だからこそ可能な先駆的・実験的な事業を展開しています。京都市立芸術大学の卒業・修了生を中心とした若手アーティストの支援、国際的に活躍するアーティストの創造と実践に触れる機会の創出、研究に根差した高い専門性を持つプロジェクト、また2023年に予定された大学キャンパス移転のプレ事業など、多種多様な企画に取り組んでいます。

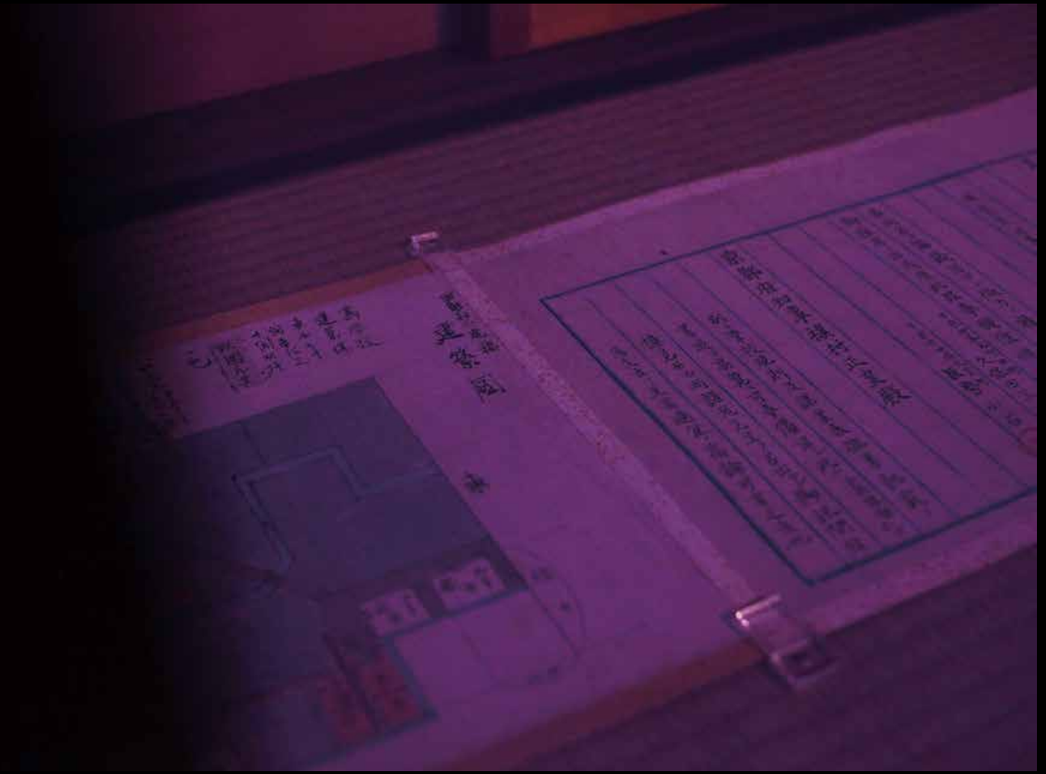
明治150年・京都のキセキ・プロジェクト
京都市立芸術大学芸術資料館収蔵品活用展

Meiji 150-nen: Kyoto no kiseki Project
With Works from the Collection of the Kyoto City University of Arts Art Museum

田村友一郎「叫び声／Hell Scream」

Yuichiro Tamura: *Hell Scream*

2018.7.21 Sat.–8.19 Sun.



ひとつの恐怖の叫び声を聞くとそれは自分自身の声でなかったかとわが耳を疑うという。

What drawing might Chokunyu undertake
when he's presented unto King Enma
by the demons from Hell? —Yosai
直入は
地獄の鬼に捉られ
閻魔の席で
何をかくらむ
地獄変
Hell Screen

京都市立芸術大学のキャンパス内には一人の画家の胸像がある。それは大学の前身となる京都府画学校の創立者の一人、日本画家の幸野楳嶺（1844–1895）の功績に敬意を表したものだ[1]。京都の街が幕末の動乱や東京遷都で衰退の危機にあった明治の初め、画壇の復興を目指して後進の教育に並ならぬ熱意をかけた楳嶺は、たびたび病に伏すも起き上がり、画学校の成就と画壇の再盛を願う強い意志のもと、その命ある限り活動を続けたそうだ。

しかし当時の京都府知事であった槇村正直に画学校設立を願い出たのは楳嶺ら京都の画家たちだけではなかった。彼らより前に文人画家（南画家）[2]の田能村直入（1814–1907）が「画学校起校上書」を提出していたのである。

田能村直入は大分の出身、京都に来たのは明治に入ってからであったが、当時人気のあった南画の大家でありながら経済界とのつながりも深く、画学校設立の資金集めに奔走し、画学校設立の資金集めに奔走してその大部分を調達したと言われている。やがて直入は日本初の公立美術学校となる京都府画学校[3]の摂理、つまり初代の学校代表者となるが、三年半でその職を退任し、学校を去る。直入が画学校に残したさまざまな資料は現在も芸術資料館の収蔵品として保存されており、その多大な貢献は言うまでもない。しかし今日に至るまで、創立者として慕われているのは直入ではなく楳嶺なのであった。

田村友一郎は、この影の創立者である田能村直入、通称小虎に関心を抱き、その足跡を辿っていく。明治、京都、画学校、文人画家、直入がその発展に寄与したと言われる煎茶道、そして虎――これらから連想・連鎖する事柄がやがて縦糸となり横糸となり、史実と虚構、明治と現代が入り交じりながら物語が紡がれていくことになる。

京都市左京区には、田能村直入が晩年を過ごした寓居が現存する。この建物は現在「若王子倶楽部 左右」と名付けられ、工芸ギャラリーとして、また京都の歴史、文化を語り合うサロンとして、日本の文化を楽しむための開かれた場となっている。田村友一郎と@KCUA一行は、この「左右」で、直入ら文人たちがいかにして煎茶を楽しんでいたかを煎茶家の佃梓央（一茶庵嫡承）、工芸文化史を専門とする研究者の前崎信也（京都女子大学准教授）に学ぶ機会を得た。煎茶が一煎目、二煎目……と供される間に、掛けられた書画について、自分の見解を自由に述べるよう促される。――山間の崖の上に一軒の家があり、手前には川に臨んで一人の人がいる。これは誰の家か、この人はここで何をしているのだろうか――。

この遊びが当時の知識人たちの間で広まった理由がなんとなくわかってきた。供される煎茶の味を語り合い、書画や器、漢詩や俳句などの解釈について意見を交わすことは、参加者がこれまで蓄積してきた教養と粋とを競い合うに等しい。

何よりそれらには、田村の作品にどこか通じるものがあった。見立てと連想、史実や文学作品からの引用、その合間に仕込まれた駄洒落や雑学、どこまでも広がりゆく作品世界に散りばめられた隠喩の数々。それらに駆り立てられ鑑賞者の頭に浮かぶさらなる連鎖。まるで、そこには居ない美術家と架空の煎茶の席を共にしているかのようだとは言えまいか。

壁に掛けられた軸を鑑賞しつつ、場に流れる声に耳を傾けていると、いつの間にかお茶が入った紙コップが手渡されている。その側面に書かれた文字列に直入の二文字を発見する。右手には檻があり、中に居たであろう人物の茶道具が散在している。その向こうには虎の姿を描いた軸が見える。校印の押されたそれは美術教育の何やらをも物語っているのだろうか。

自らがその創立に力を尽くした学校に、直入の姿はない。しかし、耳をすませば聞こえるその叫び声は直入のものだろうか、それともこの学校を通り抜けた無数の若き芸術家が発するものか。

――*君は誰だ？*
心ゆくまで叫べばよい。
その声はきっと山々を震わせることだろう。

いやその叫びは自分自身の声でなかったかと、わが耳を疑いつつ[4]も茶の滴を舌の上で転がすあなたに、声は何度も問いかける。

――*現代に生きる君たちにそれはわかるか？*
現代に生きる君たちにそれはわかるか？

（藤田瑞穂／@KCUA学芸員）

※斜体部分は展示音声の字幕からの引用

参考文献：
・京都市立芸術大学百年史編纂委員会「百年史：京都市立芸術大学」（京都市立芸術大学、1981）
・田島達也・橘凛・酒井十詩恵・松波千紘「遷る学舎：画学校から芸大まで――御苑・吉田・今熊野・沓掛」（京都市立芸術大学、2018）

1: 現在キャンパス内に立つのは二代目のセメント像。初代の銅像は1940年に完成するも4年で戦時下の金属供給のために失われ、1950年に教員と学生によって一から作り直された。
2: 文人画は中国を起源とする様式だが、中国に比べると日本における文人の定義は曖昧である。江戸時代以降、詩・書・画に優れ高い教養を身につけた人物が文人と呼ばれ、江戸時代の文化を牽引する一大勢力となった。
3: 画学校の教科は東宗・西宗・南宗・北宗の四つに分類された。中国絵画において文人画の系譜を南宗、職業画家の系譜を北宗と称するのに従い、加えて日本を起源とする絵画（大和絵、写生画）を東宗、西洋画を西宗として様々な流派の絵画を学ぶことを可能とした。しかし当時の京都の主要な画派はいずれも東宗、北宗の両方の要素を持ち、この二教科の差異は曖昧であった。そして南画は明治15年にフェノロサがその講演中で否定して以来「つくね芋山水」などと評され、関東では顕著に衰退していく。明治21年には東宗、南宗、北宗の3教科は東洋画として統一された。
4: 展示音声は「ひとつの恐怖の時代を生きたフランスの哲学者の回想によれば、人間みなが遅すぎる救助をまちこがれている恐怖の時代には、誰かひとり遥かな救いをもとめて叫び声をあげる時、それを聞く者はみな、その叫びが自分自身の声でなかったかと、わが耳を疑うということだ」という大江健三郎『叫び声』（1963、講談社）からの引用に始まる。

前身である京都府画学校が明治13年に創立されてから今日に至るまで、京都市立芸術大学は、日本の芸術文化のきわめて重要な世界への発信基地の一つであり続けてきた。平成30年が明治改元から満150年の節目の年に当たることを記念した「明治150年・京都のキセキ・プロジェクト」の一環として開催された本展では、土地の記憶や歴史を調査することからその場所固有のコンテクストを独自の手法で変換·接続し、映像·写真·インスタレーション·パフォーマンスなどさまざまな形態にて新たな風景を立ち上げる美術家の田村友一郎を企画協力作家に迎え、本学の前身·京都府画学校の創立者の一人である日本画家の田能村直入（1814–1907）の足跡を辿りながら、新たな物語を紡ぎ出すことにより本学芸術資料館収蔵品の「演出」を試みた。芸術に対する情熱のもと、絵画だけにとどまらず儒学、漢詩、茶道など幅広い分野で才能を発揮した田能村直入、通称小虎の足跡を辿るところを起点としたストーリーに基づくインスタレーションとなった。

2018年7月21日（土）–8月19日（日）
明治150年・京都のキセキ・プロジェクト／京都市立芸術大学芸術資料館収蔵品活用展
田村友一郎「叫び声／Hell Scream」

展示室：@KCUA 1, @KCUA 2
開催日数：26日間
入場者数：1,511人
企画：京都市立芸術大学ギャラリー@KCUA
企画協力・出展作家：田村友一郎（美術家）
主催：京都市立芸術大学
助成：公益財団法人 三菱UFJ信託地域文化財団
協力：城崎国際アートセンター（豊岡市）、株式会社TANK、若王子倶楽部 左右、大和文華館、ユカ·ツルノ・ギャラリー、六道珍皇寺

関連イベント

- 7月21日（土）
  14:00 | アーティストトーク
  16:00 | オープニングレセプション
- 8月4日（土）17:00
  拡張された場におけるアートマネジメント人材育成事業
  「状況のアーキテクチャー」2018
  テーマ1《物質》「モノの演出」×「リサーチ」
  第1回 嚆く茶会（煎茶）
  席主：田村友一郎
  出演：田茂井廣道（能楽観世流シテ方）、曾和鼓堂（能楽幸流小鼓方）
- 8月16日（木）18:00
  ゴードンの送り火
  上映作品：
  奥村雄樹《帰ってきたゴードン·マッタ＝クラーク》
  （2017 | HDビデオ | 47分51秒 | Courtesy of the artist and MISAKO & ROSEN, Tokyo）
  協力：六道珍皇寺
- 8月18日（土）①14:00 ②16:00
  拡張された場におけるアートマネジメント人材育成事業
  「状況のアーキテクチャー」2018
  テーマ1《物質》「モノの演出」×「リサーチ」
  第2回 嚆く茶会（抹茶）
  席主：田村友一郎
  出演：森野彰人（陶磁器作家／京都市立芸術大学美術学部准教授）、村松稔之（カウンターテナー）

写真　田村友一郎
Photos by Yuichiro Tamura

京芸 transmit program 2018

KCUA Transmit Program 2018

熊野陽平、小林紗世子、藤田紗衣、吉田桃子
Yohei Kumano, Sayoko Kobayashi, Sae Fujita, and Momoko Yoshida

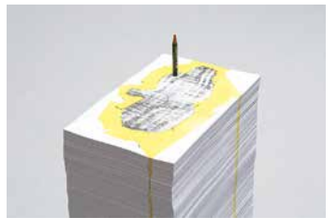
2018.4.7 Sat.–5.20 Sun.

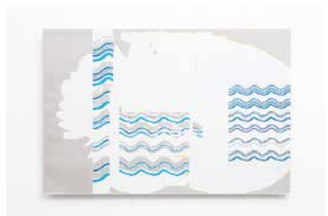
吉田桃子

熊野陽平

小林紗世子

藤田紗衣





「京芸 transmit program」は、アーティストの活動場所として日本でも1、2を争う都市京都における期待の新星を紹介するシリーズとして、京都市立芸術大学卒業・大学院修了3年以内の若手作家の中から、いま、@KCUAが一番注目するアーティストを紹介するプロジェクトである。第2弾となる本年は、熊野陽平（構想設計）、小林紗世子（日本画）、藤田紗衣（版画）、吉田桃子（油画）の4名を選出した。

2018年4月7日（土）–5月20日（日）
「京芸 transmit program 2018」

展示室：@KCUA 1, @KCUA 2
開催日数：38日間
入場者数：4,925人
企画：京都市立芸術大学ギャラリー@KCUA
主催：京都市立芸術大学

関連イベント
・4月7日（土）
14:00｜ギャラリートーク
16:00｜オープニングレセプション
・4月22日（日）15:00、4月28日（土）13:00、
5月9日（水）13:00、5月13日（日）13:00、
5月16日（水）16:00
熊野陽平ワークショップ「1/1スケール模型としての美術展示」参加者meeting

写真　来田猛
Photos by Takeru Koroda

外部連携事業
Collaborative Project

京芸 transmit program 2018: ART OSAKA version

KCUA Transmit Program 2018: ART OSAKA version

熊野陽平、小林紗世子、藤田紗衣、吉田桃子
Yohei Kumano, Sayoko Kobayashi, Sae Fujita, and Momoko Yoshida

2018.7.7 Sat.–7.8 Sun.

ホテルグランヴィア大阪で開催されるアートフェア、ART OSAKAの特別企画として、「京芸 transmit program 2018」出展作家による展示を行った。

2018年7月7日（土）–7月8日（日）
京芸 transmit program 2018: ART OSAKA version

展示室：ホテルグランヴィア大阪26階 6108号室・6109号室（ART OSAKA 2018会場内）
開催日数：2日間
入場者数：2,700人（7月6日（金）のプレビューを含む）
企画：京都市立芸術大学ギャラリー@KCUA
主催：ART OSAKA実行委員会
協力：京都市立芸術大学、京都市立芸術大学キャリアデザインセンター、ホテルグランヴィア大阪
後援：京芸友の会

im/pulse: 脈動する映像

im/pulse: Vincent Moon, contact Gonzo, and the Anthro-film Laboratory

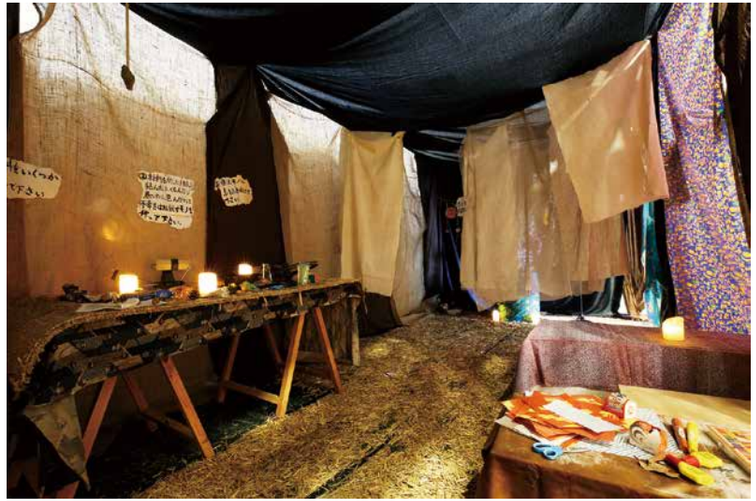
ヴィンセント・ムーン、コンタクト・ゴンゾ、アンスロ・フィルム・ラボラトリー

2018.6.2 Sat.–7.8 Sun.

Vincent Moon

contact Gonzo

Anthro-film Laboratory



美術表現が多様化する現在、広い視野と知識をもってその文脈を深く理解することは非常に重要である。90年代以降、フィールドワークなど人類学的手法を活用し、文化の差異や他者などをキーワードに意味作用を問う作品が多く見られるようになった。その次なる展開として、幅広い学問領域の知と技術を活用し、言語的な理解だけでなく、深部の感覚や感性の作用の差異を扱う表現が注目されつつある。

そこで本企画では、映像人類学的観点から見ても優れたアプローチを取る映画監督、ヴィンセント・ムーンならびに即興的な身体の接触から始まるパフォーマンス・映像・写真など発表形態を固定しない活動で国内外から高い評価を得るコンタクト・ゴンゾ、そして映像人類学者の川瀬慈率いる研究会「アンスロ・フィルム・ラボラトリー」による公開型のセミナーや実験を行った。

2018年6月2日（土）–7月8日（日）
「im/pulse: 脈動する映像」

展示室：@KCUA 1, @KCUA 2, Gallery A, B, C
開催日数：33日間
入場者数：2,058人
企画：京都市立芸術大学ギャラリー@KCUA
主催：京都市立芸術大学
助成：公益財団法人 野村財団、公益財団法人 吉野石膏美術振興財団
協力：京都芸術センター、空間現代、樋口造園株式会社、『響・HIBIKI』製作委員会、ワタリウム美術館

関連イベント

・6月2日（土）
14:00｜パフォーマンス
ヴィンセント・ムーン&プリシラ・テルモン
「SACRED+S – A Music + Cinema Ritual」
コンタクト・ゴンゾによるパフォーマンス
前林明次（アーティスト／情報科学芸術大学院大学教授）、川瀬 慈（映像人類学者／国立民族学博物館准教授）「サウンド・朗読パフォーマンス」
16:00｜オープニングレセプション

・6月7日（木）19:00–21:00
ロッセラ・ラガッツィ映像作品『受け継ぐ人々』上映会
ゲスト：ロッセラ・ラガッツィ（映像人類学者／トロムソ大学博物館准教授）
上映作品:『Fire Keepers（受け継ぐ人々）』2007年／57分／サーミ語・ノルウェー語・英語（日本語字幕付き）
レクチャー言語：英語（逐次通訳あり）
ディスカッサント：アンスロ・フィルム・ラボラトリー（ふくだぺろ／福田浩久、村津 蘭、矢野原佑史）

・6月10日（日）11:00–19:00
ワークショップ「ヴィジュアル・ストーリーテリングとダミーブック」
講師：岡本裕志（Visual Storyteller／写真家／映像ディレクター）

・6月14日（木）19:00–21:00
マーティン・グルーバー映像作品
『イスラームと聖なる森の間で』上映会
ゲスト：マーティン・グルーバー（映像人類学者／ブレーメン大学講師）
上映作品：マーティン・グルーバー、フランク・ザイデル
『Between Islam and the Sacred Forest（イスラームと聖なる森の間で）』
2016年／52分／ナル語（英語字幕付き）
レクチャー言語：英語（逐次通訳あり）
ディスカッサント：アンスロ・フィルム・ラボラトリー（ふくだぺろ／福田浩久、村津 蘭、矢野原佑史）

・6月15日（金）
ヴィンセント・ムーン レクチャー&
バシェ音響彫刻とのパフォーマンス
17:00｜レクチャー
講師：ヴィンセント・ムーン
レクチャー言語：英語（逐次通訳あり）
18:00｜「SACRED+S – A Music + Cinema Ritual」
出演：ヴィンセント・ムーン&プリシラ・テルモン、Ensemble Sonora［沢田穣治、渡辺 亮、岡田加津子（京都市立芸術大学音楽学部教授）］、北村千絵（Voice）
会場：京都市立芸術大学 大学会館ホール

・6月16日（土）15:00–17:00
韓国打楽器のリズムを用いた実験的パフォーマンス
出演：神野知恵（民族音楽・民俗芸能研究者／国立民族学博物館機関研究員）、チェ・ジェチョル（韓国太鼓奏者）

・6月20日（水）19:00–21:00
ジョン・タムラ映像作品『石川を掘る』上映会
ゲスト：ジョン・タムラ（ミュンスター大学映像人類学修士課程在籍）
上映作品：『Shoveling Ishikawa（石川を掘る）』2018年／52分／日本語（英語字幕付き）、英語（日本語字幕付き）
レクチャー言語：日本語

・6月30日（土）14:00–16:00
サウンドレクチャー「漂流する音と身体」
講師：柳沢英輔（音文化研究／フィールド録音作家／同志社大学文化情報学部助教）
聞き手：大田高充（インスタレーション／サウンドパフォーマンス）、ふくだぺろ／福田浩久（詩・メディア人類学／立命館大学先端総合学術研究科博士課程）

・7月2日（月）–4日（水）
映像人類学レクチャー&ワークショップ「映像で物語ること」
拡張された場におけるアートマネジメント人材育成事業「状況のアーキテクチャー」2018
テーマ3《社会》「記憶の演出」×「記録」
映像人類学レクチャー&ワークショップ「映像で物語ること」
講師：川瀬 慈

・7月4日（水）19:00–21:00
ふくだぺろ／福田浩久、村津蘭上映会
「革新と継承を超えた映像人類学の未来」
登壇：ふくだぺろ／福田浩久、村津 蘭（アフリカ地域研究・映像人類学／京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科博士課程）
上映作品：以下3作品
福田浩久、クリストファー・ムーレイ、リース・ルイス
『Love Thy Neighbour（汝、隣人を愛せよ）』2017年／10分／英語・ポルトガル語（日本語字幕付き）
福田浩久、アンドレア・ボルドリ、アリスター・ロマス
『Beats（ビート）』2017年／16分／英語・ペルシア語（日本語字幕付き）
村津 蘭『トホス toxosu』2017年／28分／マヒ語（日本語字幕付き）

・7月8日（日）18:00
コンタクト・ゴンゾによるパフォーマンス

写真　来田 猛
Photos by Takeru Koroda

schaubühne

写真　来田猛
Photos by Takeru Koroda

@KCUAでは毎年、国際的に活躍する海外作家の創造と実践に触れる機会として、展覧会や実践的なワークショップ、レクチャーなどを実施している。2018年度は、挑発的でアイロニカル、かつユーモア溢れる作風で知られるベルリン在住の作家、クリスチャン・ヤンコフスキーを招聘した。ヤンコフスキーは、仕事の依頼を受けた各地でさまざまな業種の人々との協働作業を通じて、アートの世界とそれとは異なる世界とを接続し、その関係性やそれぞれのあり方を問いかける活動を行っている。

本展では、龍崎飛鳥（京都紙園 Bizarre Lounge「BAR-BARA -the Bizarre-」）の緊縛とのコラボレーションによる新作を中心に、アートの世界とそうでない世界との関係性を探り続けながら、人々の意識から離れた場所にある新たな世界を提示しようとするヤンコフスキーによる「Floating World」が展開された。

2018年9月15日（土）–10月28日（日）
クリスチャン・ヤンコフスキー「Floating World」

展示室：@KCUA 1, @KCUA 2
開催日数：38日間
入場者数：3,028人
企画：京都市立芸術大学ギャラリー@KCUA
主催：京都市立芸術大学
助成：公益財団法人 アサヒグループ芸術文化財団
　芸術文化振興基金
協力：ゲーテ・インスティトゥート・ヴィラ鴨川、
　三村康仁、龍崎飛鳥（京都紙園 Bizarre Lounge「BAR-BARA -the Bizarre-」）
協賛：緊縛専門–縄屋

関連イベント
・9月15日（土）、9月16日（日）11:00–19:00
（各日とも）
　クリスチャン・ヤンコフスキー 映像作品上映会
・9月15日（土）
　14:00｜ギャラリートーク
　16:00｜オープニングレセプション
・9月16日（日）17:30–18:00
　Playing the Spree and the Moldau to the Kamo River Delta
　主演：小松千倫

KCUA OPEN CALL EXHIBITIONS

申請展

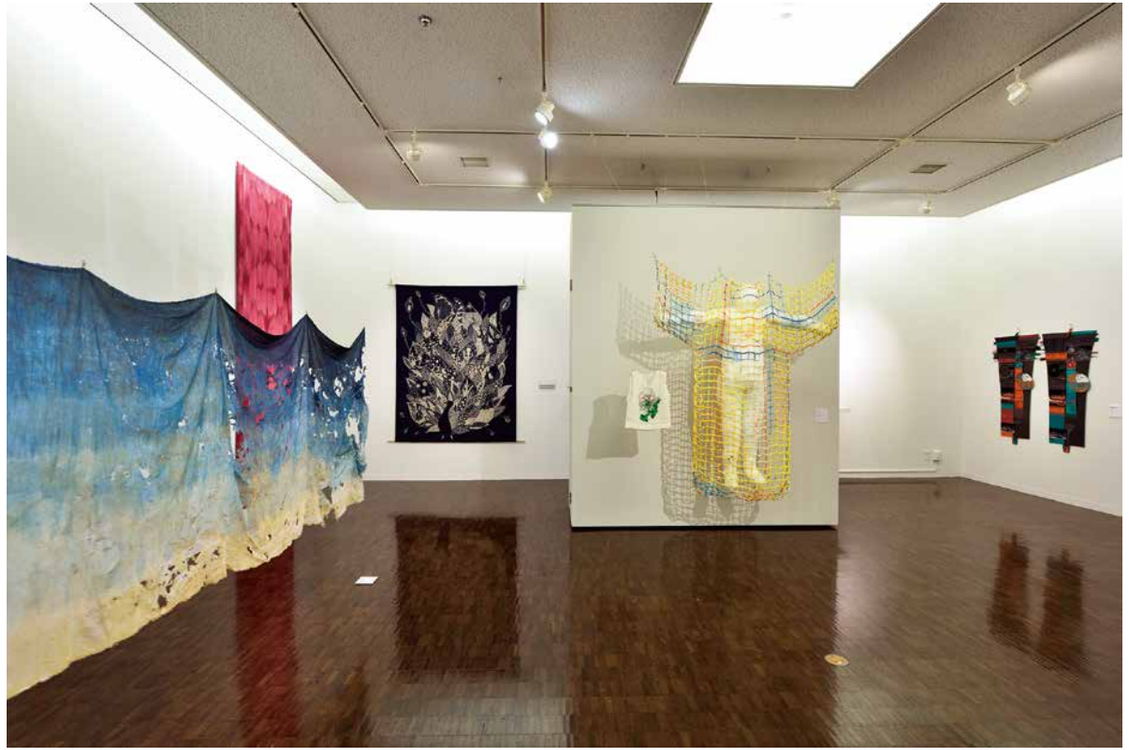
「申請展」とは、京都市立芸術大学の修了生・卒業生・教職員・在学生を対象とした企画公募により、@KCUA運営委員会による審査を経て選出された展覧会です。大学の附属施設である@KCUAでこそ実施可能な実験精神に溢れた企画や、若手作家による意欲的な企画などが優先して採択されています。

（前年度9月に公募を実施）

つながる糸 ひろがる布 —三大学染織専攻学生選抜展—

Intercollegiate Textile Student Exhibition

2018.8.25 Sat.–9.2 Sun.



金沢美術工芸大学、京都市立芸術大学、東京藝術大学の染織分野における交流と学生の研究発表の場となる三大学合同展の第6回展。普段は各大学内の工房で制作し、友人や教員と作品をめぐって定期的に議論している学生たちだが、このように大勢の鑑賞者を交え、作品を前に率直な意見交換がなされる機会は、今後の制作への大きな刺激となり、相互の成長を促す糧となる。

出展作家

京都市立芸術大学
田代 葵、山本 葵（2018年度入学|大学院1年）
野口結貴、山本紗佑里、メニ・ムブーガ
（2017年度入学|大学院2年）
賛助出品教員：日下部雅生、野田涼美

東京藝術大学
金田真咲、長谷川博子、山田珠子（2018年大学院入学|修士1年） 荒井悠希（2016年大学院入学|修士2年）
大小田万侑子（2018年博士課程入学|博士1年）
賛助出品教員：上原利丸、橋本圭也

金沢美術工芸大学
前田博子（2017年博士後期課程入学|博士2年）
岩井美佳、新村和泉（2018年博士後期課程入学|博士1年）
渡邉美咲（2016年修士課程入学|大学院2年）
椋梨日向子（2018年修士課程入学|大学院1年）
賛助出品教員：大高 亨、加賀城 健

2018年8月25日（土）–9月2日（日）
つながる糸 ひろがる布 —三大学染織専攻学生選抜展—

展示室：@KCUA 1
開催日数：8日間
入場者数：971人
主催：京都市立芸術大学

関連イベント
・8月25日（土）11:00
「つながる糸 ひろがる布」ギャラリートーク

写真 大島拓也
Photos by Takuya Oshima

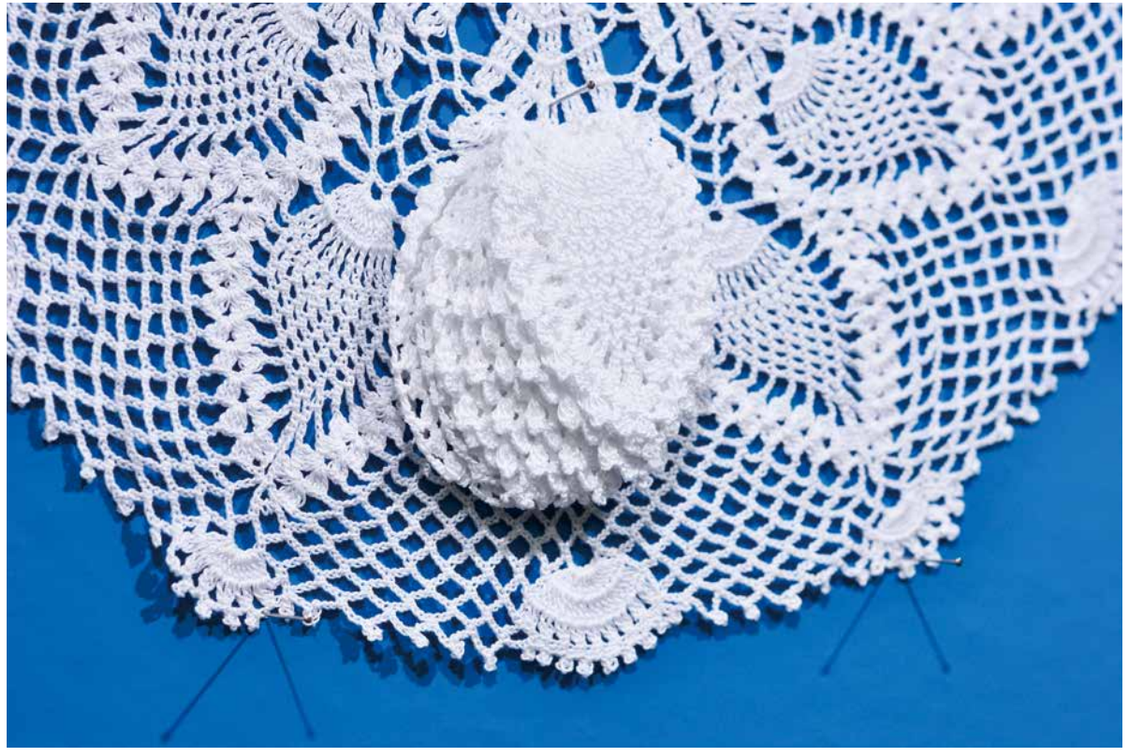
大谷史乃・長町那美・前田菜月

Shino Otani, Nabi Nagamachi, and Natsuki Maeda

人工的品

Jinkoutekishina

2018.8.25 Sat.–9.2 Sun.



これは演奏するもの

サングラス？またはメガネ？

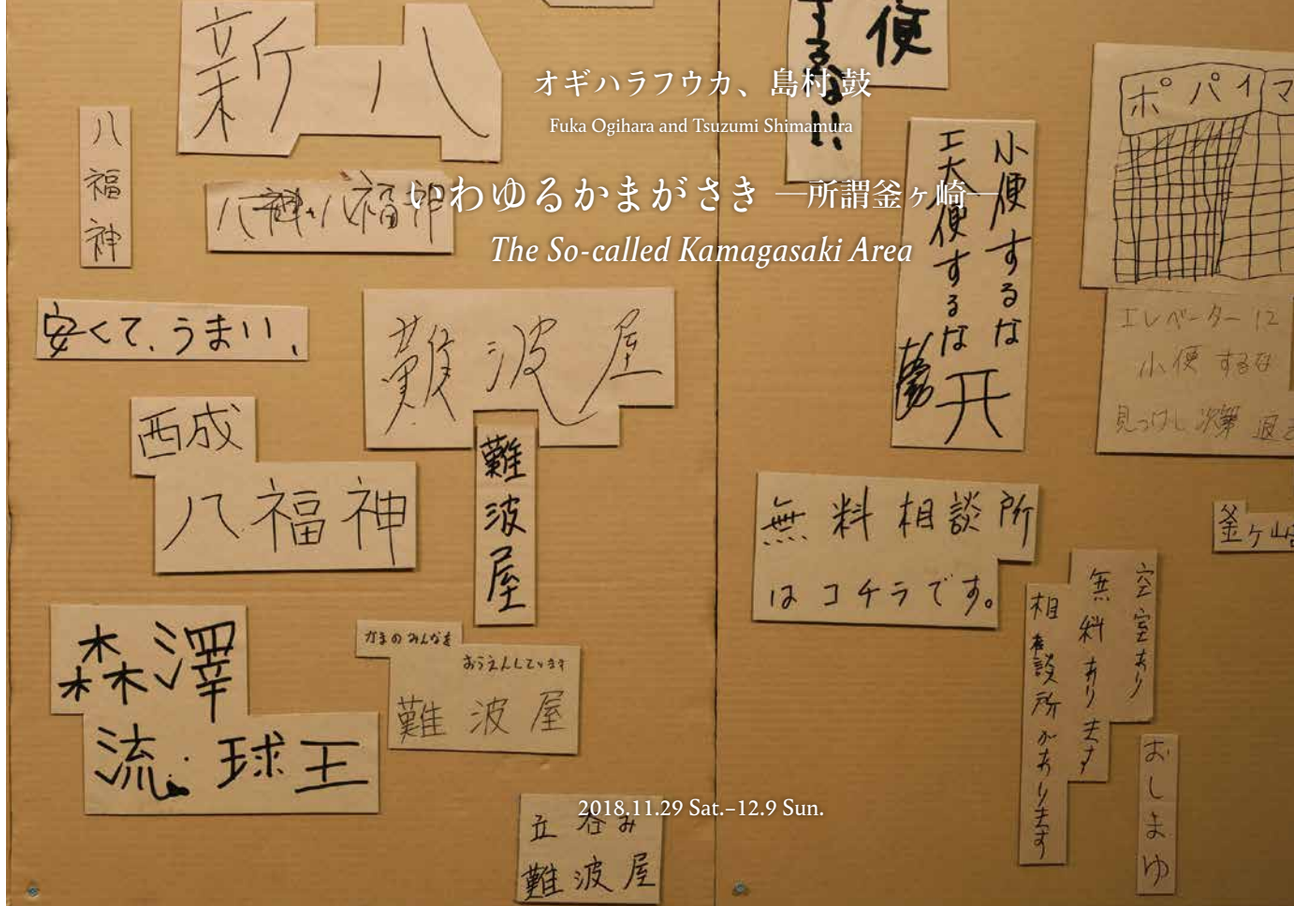
写真 大島拓也（p.57を除く）
Photos by Takuya Oshima

工芸専攻の出身であるという背景を持ちながら、一般的な「工芸作品」という言葉から想像されるものとは、ややかけ離れた表現をおこなっている3名の作家による展覧会。現在の「工芸」という枠組みの中で作品を制作することに対して、それぞれ疑問や問題意識を抱えながら制作を続けてきた3名が共通して考えているのは、工芸には「もの」が必要不可欠ということである。たとえどんな技を持っていようと、ものがなければ技を発揮することができず、それを介しての人間の動きも生まれようがない。
素材がもつ表情や質感、制作過程における特有の身体の動き。工芸という行為が発生する瞬間。あるいは、生存のための手仕事に潜む素朴な魅力、それとは正反対の、驚異的な技術の産物。“工芸”という言葉が指すものを、この世のあらゆるもの、とりわけ「人間によってつくられたもの」の中から抽出することから始める姿勢を示す展覧会となった。

2018年8月25日（土）–9月2日（日）
大谷史乃・長町那美・前田菜月「人工的品」

展示室：@KCUA 2
開催日数：8日間
入場者数：935人
主催：京都市立芸術大学

関連イベント
・9月2日（日）15:00
　クロージングイベント「ふしぎな道具の使い方 実践編」



オギハラフウカ、島村鼓

Fuka Ogihara and Tsuzumi Shimamura

いわゆるかまがさき ―所謂釜ヶ崎―

The So-called Kamagasaki Area

2018.11.29 Sat.–12.9 Sun.

大阪府大阪市西成区の北部、JR新今宮駅の南側に位置する「あいりん地区」、いわゆる釜ヶ崎は、ドヤとよばれる簡易宿泊所が建ち並ぶ労働者の街として知られています。釜ヶ崎は日本最大の貧困地域と呼ばれ、最も多くの生活保護受給者が暮らしています。そこは、彼らのセーフティーネットとしての大きな役割を担っています。そしていま、釜ヶ崎は「労働者のまち」から「福祉のまち」へと変貌しようとしています。生活に困窮した中高年男性が新たに流入したことも相まって、釜ヶ崎は新しい高齢化社会を迎えています。長年寄せ場として機能し、日本の最も貧しい人々が集合するこの場所は、貧困にあえぐ高齢者の終の棲家としての機能をいま果たしているのです。

私たちは、そこにすむ釜ヶ崎のおっちゃんと等身大で向き合い、交流を行いました。釜ヶ崎のおっちゃんを描いたポートレートは、釜ヶ崎のおっちゃんたちの豊かな表情を伺うことができます。そしてそこから、釜ヶ崎が抱える、さまざまな「いま」を伝えたいと考えています。

また、現在の釜ヶ崎には日本語以外の言語や福祉のまちとしての特徴的な言葉が溢れています。目に入ってくる「文字」を地域に住む人々とともに記録し、釜ヶ崎と人々の「いまの風景」を再構成します。（オギハラフウカ・島村鼓／2018年10月）

写真 大島拓也
Photos by Takuya Oshima

2018年11月29日（土）–12月9日（日）
いわゆるかまがさき ―所謂釜ヶ崎―

展示室：@KCUA 2
開催日数：10日間
入場者数：621人
主催：京都市立芸術大学
協力：中野ふくね

山角洋平、松延総司、ガブリエ・バロンタン、
マルティネス・バラ・ラフォール・アーキテクツ（バンジャマン・ラフォールとセバスチャン・マルティネス・バラ）
Yohei Yamakado, Soshi Matsunobe, Valentin Gabelier, and
Martinez Barat Lafore Architectes (Benjamin Lafore and Sébastien Martinez Barat)

Partition――パーティション
Partition

2018.12.15 Sat.–12.24 Mon.

「パーティション」という言葉はフランス語で、音楽あるいは振り付けを記した紙のことを指す。またそれだけではなく、身体的な空間における分割の体系を表す。このテーマの曖昧さは、非＝表現的な領域に属するものに形を与えるという試みの集積に含まれる。本展では、造形作家、音楽家、建築家、そしてキュレーターの活動を通じて、この多義的な表題の用い方の可能性を探求し、両義性についての思索を提示した。

2018年12月15日（土）–12月24日（月・振休）
Partition——パーティション

展示室：@KCUA 1
開催日数：9日間
入場者数：953人
主催：京都市立芸術大学

関連イベント
・12月15日（土）18:30–21:00
　Partition——パーティション オープニングイベント
・12月23日（日）17:00–19:00
　Partition——パーティション クロージングイベント

写真 大島拓也
Photos by Takuya Oshima

松井沙都子

Satoko Matsui

モデルハウス

Model House

2018.12.15 Sat.–12.24 Mon.

家は日常生活の背景であり、多くの人にとってほとんど意識に上ることがないものかもしれません。しかし家は、社会に生きる人の生活を映し出すものであり、それをつぶさに見つめることは、社会の一端に触れることに他なりません。私はこうした考えに基づき、作品制作を通じて、自身の暮らしてきた現代の日本の家について考えてきました。本展ではこの一環として、家をモチーフとしたインスタレーション作品を展開します。

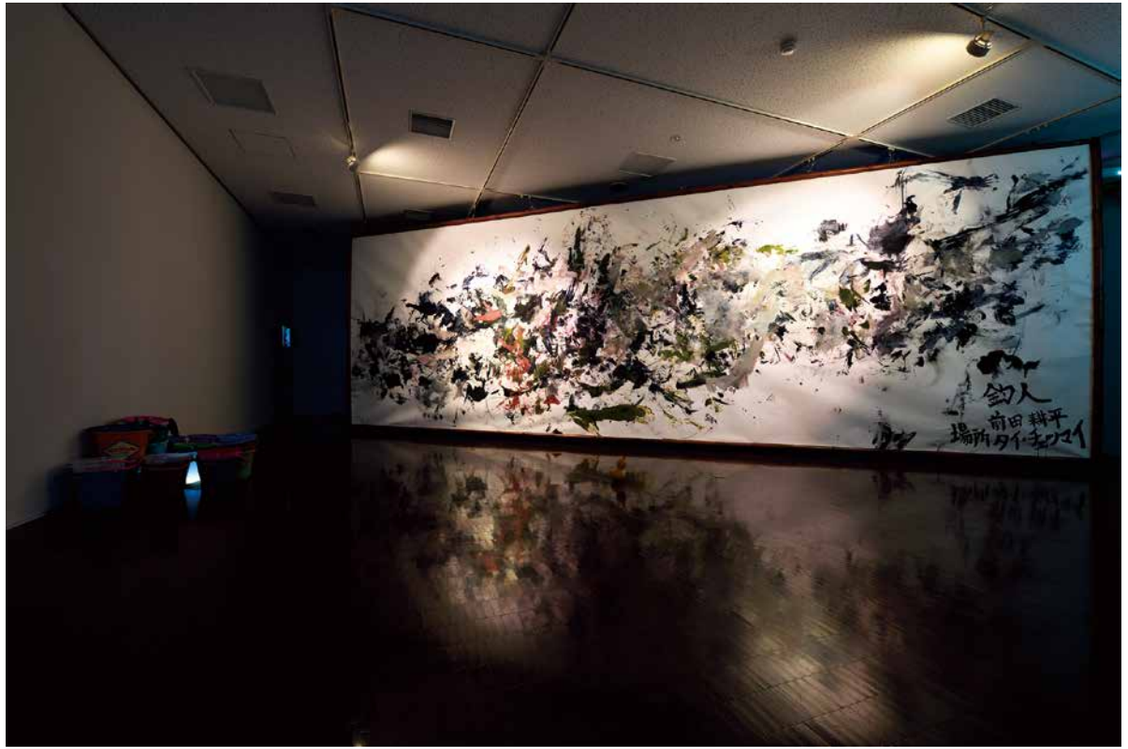
本展を構成するのは、現代の日本の家に用いられるような木材を下地に、落ち着いた色味の壁紙と床材、そして温かい光を灯す照明器具を組み合わせた、立体的な造形物です。それはまるで現代の日本の家そのもののようですが、実在する家を再現したものではなく、住むための機

能もありません。そこに現れるのは、今日の私たちにとってなじみ深い、穏やかで感じの良い住環境と、似て非なる空間です。本作を通じて、かつて抽象画が具象画からエッセンスを抽出したように、具体的な家からエッセンスを抽出し、抽象的な「家」を成立させることを試みます。本展では展示空間全体を、一つのモデルハウスに見立てます。モデルハウスもまた人の住まない家であり、一般化された理想的な住環境がモデルとして提示される点において、抽象的な「家」であると考えます。私はこの「家」によって、今日の私たちの生活とその周囲に広がる社会がいかなるものなのかを問いかけたいと思います。（松井沙都子／2018年11月）

写真 大島拓也
Photos by Takuya Oshima

2018年12月15日（土）–12月24日（月・振休）
松井沙都子「モデルハウス」

展示室：@KCUA 2
開催日数：9日間
入場者数：908人
主催：京都市立芸術大学
助成：公益財団法人 野村財団
京都芸術センター制作支援事業
制作協力：幸せ工務店


釣人
前田 耕平
場所 タイ・チェンマイ

前田耕平は、人や自然、物事との関係や距離に興味を向け、自らの体験を手がかりに、これまで映像やパフォーマンスなど様々なアプローチによる探求の旅を続けている。2018年にはアーティスト・イン・レジデンスのプログラムでタイのチェンマイに滞在し、メコンオオナマズが生息するダムを舞台にリサーチを行った。本展では、その体験をもとに作られた新作《パンガシアノドン ギガス》が展示された。

2019年2月16日（土）–3月3日（日）
前田耕平「パンガシアノドン ギガス」

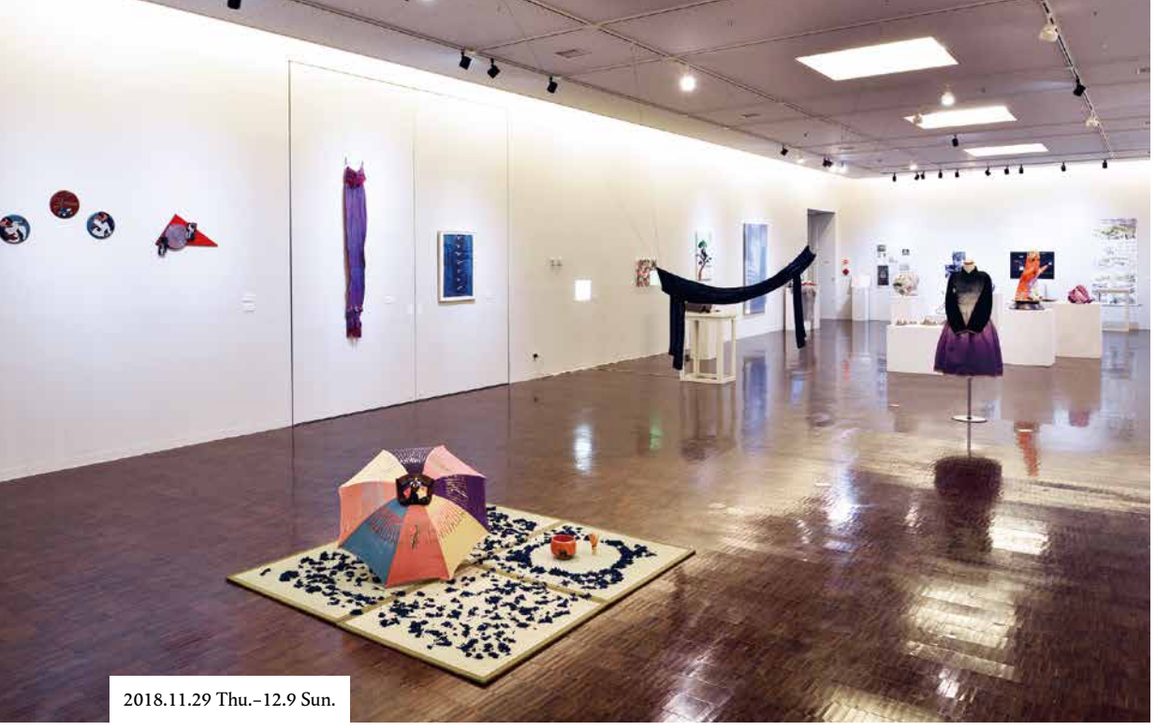
展示室：@KCUA 2
開催日数：14日間
入場者数：2,143人
主催：京都市立芸術大学

関連イベント

- 2月16日（土）16:00
  2018年度 京都市立芸術大学美術学部同窓会展との合同オープニングレセプション
- 2月23日（土）15:00
  トークイベント
  ゲスト：徳山拓一（森美術館アソシエイト・キュレーター）

写真 大島拓也
Photos by Takuya Oshima

KCUA EXHIBITIONS



2018.11.29 Thu.–12.9 Sun.

京都市立芸術大学 | 第29回 留学生展

Kyoto City University of Arts | 29th International Student Exhibition

京都市立芸術大学に在学する留学生と市民との交流機会として、毎年冬に開催される本展では、修士課程の本科留学生、研究留学生、交換留学生による作品が展示された。

（本年度出品学生：イギリス、イタリア、韓国、コンゴ、スペイン、台湾、中国、フランスから37名）

出展作家

大学院修士2年
陸 瑋妮 | Lu Wei Ni、ムブーガ・メニ | Mbugha Meni
大学院修士1年
姜 登耀 | Chiang Teng Yao、鍾 鳴 | Zhong Ming、
宋 歆怡 | Song Xin Yi、余 抒霞 | Yu Shu Xia、
詹 涵逸 | Chan Han Yi、張 瑜芳 | Chang Yu Fang、
楊 妹菲 | Yang Shu Fei、林 婷 | Lin Ting、
関 人愷 | Guan Ren Kai、金 旼秀 | Kim Minsoo
研究留学生
周 妍 | Zhou Yan、殷 之貝 | Yin Zhi Bei、劉 信 | Liu Xin、
肖 力三 | Xiao Lisan、沈 楠 | Shen Nan、
梁 蘭若 | Liang Lan Ryo、封 懿航 | Feng Yi Hang、
銭 俊楠 | Qian Jun Nan、柳 濟閏 | Ryu Je Yoon、
周 逸喬 | Zhou Yi Qiao、易 以柔 | Yih Yi Roh、
盧 琬京 | Lu Wan Jing、熊 骁 | Xiao Xiong、賀 蘭 | He Lan、
路 竣甲 | Lu Jun Jia、冯 相涵 | Feng Xiang Han、
關 正玟 | Kuan Cheng Wen、朱 艺然 | Zhu Yi Ran
交換留学生
趙 思凡 | Zhao Si Fan、ジョセフィーン・トポランスキ | Joséphine Topolanski、レナ・マルティネズ | Léna Martinez、
ジョイ・ボンフィェルド=コロンバラ | Joy Bonfield-Colombara、
アリアンヌ・アルベロラ | Ariane Alberola、
マリア・マルティン・カルアスコ | Maria Martin Carrasco、
エレナ・チネリ | Elena Cinelli

2018年11月29日（木）–12月9日（日）
京都市立芸術大学 第29回 留学生展

展示室：@KCUA 1, Gallery A
開催日数：10日間
入場者数：671人
主催：京都市立芸術大学

関連イベント
・ 11月29日（木）17:00
ギャラリートーク

写真　大島 拓也
Photos by Takuya Oshima

2018年度 京都市立芸術大学美術学部同窓会展

KCUA Alumni Association Exhibition 2018–2019

京都市立芸術大学芸術資料館の収蔵品である松井紫朗《FLOWER VASE》（1985年度京都市立芸術大学大学院美術研究科彫刻専攻修了作品）の修復プロジェクトの成果発表に加え、1990年代に在学した美術学部同窓会員が当時制作した作品を展示した。

出展作家

松井紫朗、森下希和子*、野村陽子、長尾朋子、
長谷川誠子、丸橋加奈子*、堀部恵美子*、
三浦洋子、中村七海、米増由香、三宅砂織、松本 尚
*以外は京都市立芸術大学芸術資料館収蔵品

2019年2月16日（土）–3月3日（日）
2018年度 京都市立芸術大学美術学部同窓会展

展示室：@KCUA 1
開催日数：14日間
入場者数：2,122人
主催：京都市立芸術大学
　京都市立芸術大学美術学部同窓会象の会

関連イベント
・2月16日（土）
　14:00｜出品作家によるトーク
　16:00｜前田耕平「バンガシアノドン ギガス」
　との合同オープニングレセプション

写真　大島 拓也
Photos by Takuya Oshima

2018.11.10 Sat.–11.25 Sun.

京都市立芸術大学退任記念 | 秋山陽 ―はじめに土ありき―

Kyoto City University of Arts Retirement Exhibition | Yo Akiyama: *In the Beginning Was Clay*

土と自らの創意とを融合させようと試み、やがて土を超えた存在を作り出してきた陶芸家、秋山陽は、大学退任を自らの制作における大きな節目と捉え、これまで考察してきた事柄を俯瞰し、それらの統合を試みた新作を本展にて発表した。この作品と対比する形で、本学に着任した頃の代表作品も出品された。

写真　来田 猛
Photos by Takeru Koroda

2018年11月10日（土）–11月25日（日）
京都市立芸術大学退任記念
秋山陽―はじめに土ありき―

展示室：@KCUA 1, @KCUA 2
開催日数：14日間
入場者数：1,543人
主催：京都市立芸術大学
協力：アートコートギャラリー

関連イベント
・11月10日（土）
14:30 | ギャラリートーク
16:00 | オープニングレセプション
・11月15日（木）17:00
特別対談 | 三島喜美代さんを囲んで
・11月23日（金・祝）14:00–15:30
対談 | 質量のある現実の中で
生きること・つくること
登壇：井上明彦（京都市立芸術大学教授・造形計画）
磯部洋明（京都市立芸術大学准教授・宇宙物理学）

2019.3.9 Sat.–3.24 Sun.

出原司 京都市立芸術大学退任記念「かいじゅうvsかいじゅう」

Tsukasa Izuhara Kyoto City University of Arts Retirement Exhibition: *Kaiju vs Kaiju*

写真　大島 拓也
Photos by Takuya Oshima

出原司は自らの作品をオーバーサイズプリントと呼称し、版画ではあるけれど目の前にそびえ立つ偉物とでもいうようなものを目指して制作してきた。本展では出原の作品に加え、学生たちと共に制作した本学教員によるリトグラフや、ゲストの怪獣絵師、開田裕治のイラストレーションが展示された。

右から2点：開田裕治作品

2019年3月9日（土）–3月24日（日）
出原司 京都市立芸術大学退任記念
「かいじゅうvsかいじゅう」

展示室：@KCUA 1, @KCUA 2
開催日数：14日間
入場者数：1,332人
主催：京都市立芸術大学

関連イベント
・3月9日（土）
14:00 | ギャラリートーク
16:00 | オープニングレセプション

2019.1.12 Sat.–2.11 Mon

状況のアーキテクチャー展

Situation Design 2016–2019

写真　大島 拓也
Photos by Takuya Oshima

《物質：大学所有アーカイブの創造的な活用法を探る》《生命：ケア×アートで新たな生存の技法を探る》《社会：地域コミュニティのコアを担い得る芸術大学の仕組みを探る》のテーマのもと、芸術・大学・地域をつなぐ役割としてのアートの可能性を検討するプログラムの3年間の活動を集約した展覧会。

2019年1月12日（土）–2月11日（月・祝）
状況のアーキテクチャー展

展示室：@KCUA 1
開催日数：27日間
入場者数：1,458人
企画：拡張された場におけるアートマネジメント人材育成事業「状況のアーキテクチャー」
主催：京都市立芸術大学
助成：平成30年度文化庁「大学における文化芸術推進事業」
事業統括：
高橋 悟（京都市立芸術大学美術学部構想設計専攻教授）
シニアプログラムコーディネーター：西尾咲子
プログラムコーディネーター：岸本光太、熊野陽平、中田有美
プロジェクトマネジメント：藤田瑞穂
事務局：岡本 栞、安西美恵子

関連イベント
・1月26日（土）13:00–15:00
　トークイベント「京芸移転のA to Z！状況のアーキテクチャー番外編」
・2月11日（月・祝）14:00–15:30
　トークイベント「状況のアーキテクチャー 大茶話会」

ジェン・ボー レクチャー
「ポスト社会主義の中国におけるソーシャリー・エンゲージド・アート」
Lecture by Zheng Bo: *Socially Engaged Art in Post-Socialist China*

2019年1月27日（日）15:00–16:30

会場：@KCUA 2
入場者数：45人
レクチャー言語：英語（逐次通訳あり）
企画：京都市立芸術大学ギャラリー@KCUA
主催：京都市立芸術大学

講師：ジェン・ボー／鄭波（アーティスト、文筆家、香港城市大学クリエイティブ・メディア学部助教授）

ジェン・ボー（1974年北京生まれ、香港在住）は、社会的に周縁化された集団や雑草などの植物に注目し、政治的な史実、アーカイブなどの過去の事物の調査にそれらを結びつけ、未来について考察する作品で知られる。2019年6月に実施される@KCUAでの個展のプレ・イベントとして、ジェンが長年研究に携わってきた中国のソーシャリー・エンゲージド・アートについてのレクチャーが行われた。過去40年間で劇的な変化を遂げている中国は、より豊かになりつつある一方で、複雑な社会問題に直面している。これらの問題、特に環境、生活、教育に対して、多くの中国人アーティストが力強い表現の作品を制作してきた。本レクチャーは、幾つかの優れた代表的なプロジェクトを例に、アーティストたちがどのようにアイデアを発展させ、挑戦を成し遂げ、芸術的な境界を押し広げたかということに焦点を当てたものとなった。

特別展｜Special Exhibitions

1 京芸 transmit program 2018
デザイン：仲村健太郎｜designed by Kentaro Nakamura

2 im/pulse: 脈動する映像
デザイン：松本久木｜designed by Hisaki Matsumoto

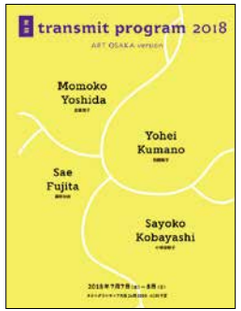
3 京芸 transmit program 2018:
ART OSAKA version
デザイン：仲村健太郎｜designed by Kentaro Nakamura

4 明治150年・京都のキセキ・プロジェクト／
京都市立芸術大学芸術資料館収蔵品活用展
田村友一郎「叫び声／Hell Scream」
デザイン：尾中俊介（Calamari Inc.）
designed by Shunsuke Onaka (Calamari Inc.)

5 クリスチャン・ヤンコフスキー「Floating World」
デザイン：松本久木｜designed by Hisaki Matsumoto

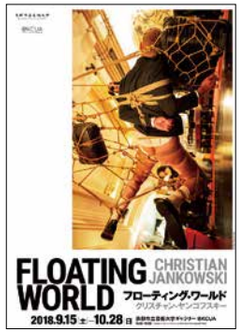
1 A4版フライヤー

2 A4（変形）版フライヤー



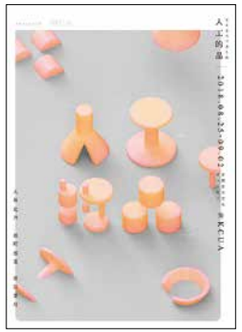
3 A5仕上がり両観音折りリーフレット

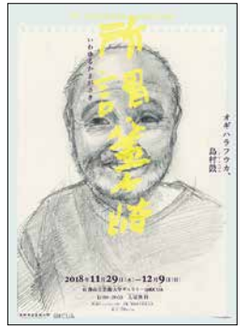
4 A4版フライヤー



5 A4版フライヤー

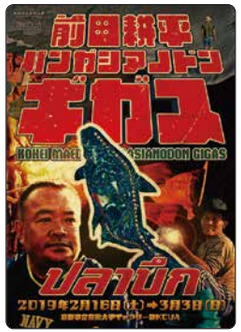
6 ポストカード


7 A4版フライヤー


8 A4版フライヤー

9 A5版フライヤー

10 A4版フライヤー



11 A4版フライヤー

学内申請展
KCUA Open Call Exhibitions

6 つながる糸 ひろがる布 —三大学染織専攻学生選抜展—
デザイン：山本 葵｜designed by Aoi Yamamoto

7 大谷史乃・長町那美・前田菜月「人工的品」
デザイン：茗荷恭平｜designed by Kyohei Myoga

8 いわゆるかまがさき —所謂釜ヶ崎—
デザイン：仲村健太郎｜designed by Kentaro Nakamura

9 Partition——パーティション
デザイン：ガブリエ・バロンタン
designed by Valentin Gabelier

10 松井沙都子「モデルハウス」
デザイン：見増勇介｜designed by Yusuke Mimasu

11 前田耕平「バンガシアノドン ギガス」
デザイン：松本久木｜designed by Hisaki Matsumoto

大学事業｜KCUA Exhibitions

12 京都市立芸術大学 第29回 留学生展
デザイン：楊 姝菲｜designed by Yang Shu Fei

13 京都市立芸術大学退任記念
秋山陽―はじめに土ありき―
デザイン：見増勇介｜designed by Yusuke Mimasu

14 出原司 京都市立芸術大学退任記念
「かいじゅうvsかいじゅう」
デザイン：仲村健太郎｜designed by Kentaro Nakamura

15 状況のアーキテクチャー展
デザイン：柳澤裕樹｜designed by Yuki Yanagisawa

12　A4版フライヤー

14　B3判フライヤー

13　A4版フライヤー

15　A4版フライヤー

書籍｜Book

京芸 transmit program 2018

判型：B5変形
寸法：26 ×19.8 × 0.7 cm
カラー：フルカラー
ページ数：64 pp.

編集：藤田瑞穂、永田絵里
写真：来田 猛
装丁・組版：仲村健太郎
印刷：株式会社ライブアートブックス（大伸社）
発行者：京都市立芸術大学ギャラリー@KCUA
発行日：2018年7月7日

収録内容：藤田瑞穂「連なる偶とその連鎖」、展示風景写真、作品図版、アーティストステートメント、参考図版、作家略歴、会場マップ、住友文彦「複数のメディアを行き来する者たち」
言語：日本語、一部英語

広報誌 | Zines

たねまきアクア 05

判型：B6
寸法：18.2 × 12.3 × 0.2 cm
カラー：フルカラー
ページ数：32 pp.

編集：西谷枝里子（リレーリレー）、藤田瑞穂、
　永田絵里、西尾咲子
デザイン：仲村健太郎
発行者：京都市立芸術大学ギャラリー @KCUA
発行日：2018 年 6 月 15 日

収録内容：たねまきアクアは、@KCUA（アクア）とその周辺に広がる創造活動の現在形、クリエーションが立ち上がろうとしているシーンを紹介していく広報誌です（不定期発行、無料）。
- STUDIO VISIT @KCUA vol. 5：
　クリスチャン・ヤンコフスキー「ベルリンのスタジオ」
- WORKSHOP @KCUA：
　「アーティストワークショップ 後日譚」
- SCHEDULE @KCUA 2018.4–2019.3
- VOICE @KCUA vol. 5：田中みゆき
　「見えない人にとってこの冊子は白紙です。」
- REPORT @KCUA：田村友一郎「麗水」

言語：日本語

たねまきアクア 06

判型：B6
寸法：18.2 × 12.3 × 0.2 cm
カラー：フルカラー
ページ数：32 pp.

編集：西谷枝里子（リレーリレー）、藤田瑞穂、
　永田絵里、西尾咲子
デザイン：仲村健太郎
発行者：京都市立芸術大学ギャラリー @KCUA
発行日：2019 年 3 月 25 日

収録内容：たねまきアクアは、@KCUA（アクア）とその周辺に広がる創造活動の現在形、クリエーションが立ち上がろうとしているシーンを紹介していく広報誌です（不定期発行、無料）。
- REPORT @KCUA：ジェン・ボー
- REPORT @KCUA：
　「京都賞受賞記念 ジョーン・ジョナス ワークショップ」
- PREVIEW @KCUA：
　「京芸 transmit program 2019」
- SCHEDULE @KCUA：2019.4–2020.3
- VOICE @KCUA vol. 6：重本晋平「関係づける視点」
- STUDIO VISIT @KCUA vol. 6：
　今村遼佑、久門剛史「二つ並びのスタジオ」

言語：日本語

京都市立芸術大学ギャラリー@KCUAについて

京都市立芸術大学では、京都市西京区の学内施設として1991年より芸術資料館を開館し、陳列室で所蔵品の展示を行うほか、大小二つの学内ギャラリー、大学会館など展示に使用できるスペースを持ち、また時にアトリエ棟や新研究等なども活用しながら展示活動を継続しています。これらは作品鑑賞の機会を提供し、また学生たちの日頃の活動成果を公開する実験的発表の場としても機能しています。2010年春、京都堀川音楽高等学校の新築移転に伴って、その敷地内南側にギャラリー棟（堀川御池ギャラリー）ができ、そこに京都市立銅駝美術工芸高等学校と共に、京都市立芸術大学ギャラリー@KCUA（アクア）が2010年4月2日からオープンしました。

「@KCUA」は大学の英語表記「Kyoto City University of Arts」の頭文字に場所を示す「@」を加えたもので、音読みするとラテン語の「アクア＝水」となります。生命を養う水のように、芸術が人々の暮らしに浸透し、創造力豊かな社会に貢献するという本学の理想を表現しています。アクア・プロジェクトとは「京都市立芸術大学の三つの機関、美術学部・音楽学部・日本伝統音楽研究センターが連携して、ユニークな芸術研究・教育の一端を地域社会に開いていく試み」として開始されたもので、当ギャラリーにも同様の意図が込められています。@KCUAに期待される役割には、以下の三つがあります。

1　教育・研究成果を広く市民へ公開すること

創立以来140年にわたって本学では、様々な成果を生み蓄積し、大学の内外で公表しています。京都市の中心部に発表の場ができたことによって、より身近な場で市民に公開できる機会が得られることになりました。ここでは在校生、教員および卒業生の研究成果に基づく展覧会、ワークショップ、講演・講座等を市民向けに開催すると共に、京都を中心とする産業界や教育機関、研究機関との連携プロジェクトの成果を発表することが期待されます。

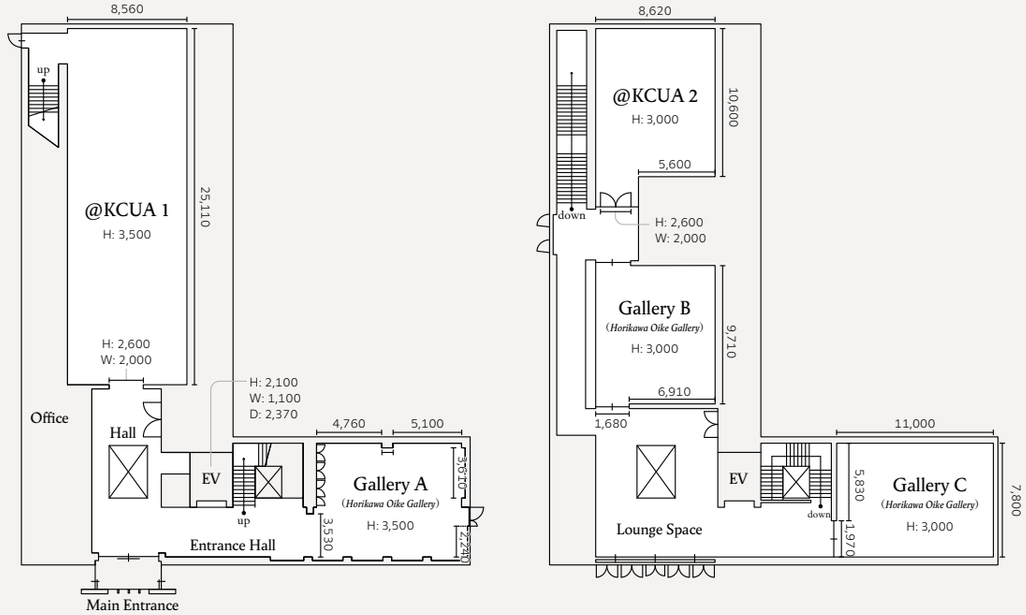
2　芸術文化創出の人材交流の場とすること

ギャラリーにおける展覧会、ワークショップ、講座等の企画に際し、成果の公表そのものを目的とするだけではなく、学内、同窓会、市民、産業界、教育関係諸機関、研究所などとの連携プロジェクトを通じて、広く人々が交流できる場を形成します。

3　芸術資源の連携活用のサテライト機能を果たすこと

本学と市民、京都市、産業界、他の諸機関が連携するにしても、基盤となるのは、情報の収集と交換です。京都が有する芸術資源としての人、物、場所、風景や景観、技術、材料、暮しの知恵に関わる情報を収集し、蓄積し、交流させる機関が必要となります。本ギャラリーは、衛星的な位置を利して、情報の収集、蓄積、交換（発信と受信）の一翼を担います。

1/500
単位｜Scale: mm



2018年度ギャラリー@KCUA｜運営委員会組織

委員長
鶴田憲次｜@KCUA長／堀川御池ギャラリー館長

委員
森野彰人　@KCUA担当理事
赤松玉女　美術学部長
栗本夏樹　美術研究科長
田島達也　芸術資料館長
日下部雅生　美術学部広報委員会委員長
柿沼敏江　音楽学部教員
石橋義正　美術学部教員（副委員長）
楠田雅史　美術学部教員
齋藤 桂　日本伝統音楽研究センター教員
佐藤知久　芸術資源研究センター教員
藤田瑞穂　@KCUA学芸員
永田絵里　@KCUA学芸員
藤本信和　事務局長
天沼 憲　総務広報課長
山崎弥生　連携推進課長
松井菜摘　附属図書館・芸術資料館学芸員

2018年
5月16日（水）運営委員会
7月12日（木）運営委員会
10月10日（水）企画・申請展部会、運営委員会
12月5日（水）運営委員会
2019年
1月10日（木）運営委員会
3月15日（金）運営委員会

2018年度京都市立芸術大学ギャラリー @KCUA｜運営体制

@KCUA長
鶴田憲次（堀川御池ギャラリー館長 兼任）
@KCUA担当理事
森野彰人（京都市立芸術大学美術学部陶磁器専攻准教授）
学芸員
藤田瑞穂、永田絵里
スタッフ
伊藤学美、清田泰寛
経理担当
安西美恵子
インターン
深尾茅奈美（2018年12月–2019年3月）

京都市立芸術大学ギャラリー @KCUA
2018年度（平成30年度）年次報告書

発行日：2020年3月31日

編集・発行：京都市立芸術大学ギャラリー @KCUA
Edited and published by Kyoto City University of Arts Art Gallery @KCUA
〒604-0052 京都市中京区押油小路町238-1
238-1 Oshiaburanokoji-cho, Nakagyo-ku, Kyoto 604-0052 JAPAN
PHONE: 075 253 1509
FAX: 075 253 1510
URL: http://gallery.kcua.ac.jp

ブックデザイン｜Book design
Studio Kentaro Nakamura

印刷｜Print
株式会社ライブアートブックス
LIVE Art Books Inc.

ISSN 2435-6018
©2020 京都市立芸術大学 Kyoto City University of Arts

http://gallery.kcua.ac.jp

京都市立芸術大学 Kyoto City University of Arts @KCUA